



底知れない欲望に囚われて

精霊風姫

シルフィア

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

地球とは異なる別世界。

身分や金銭の概念が存在しない原始的な世界だが争いもなく自然豊かな世界。

そこでは善の心を持った妖精達が幸せに暮らしていたが、ある時から邪悪な心を持つ邪精霊が生まれ、平和だった世界に戦争が勃発。これまでに戦いの概念が存在しなかった妖精達は、なす術無く邪精霊達に蹂躪され大半が死に絶え、残りの者達は、奴隷に堕ちるか身を隠す事しか出来なかった。

そんな絶望的な状況に偶然地球に転移するゲートが発見され、純粹な心を持つ人間に助けを求めるべく四体の精霊は地球へと降り立つ。

それを察知した邪精霊も地球に転移すると邪悪な心を持つ人間に憑依し、地球を舞台に妖精達の代理戦争が行われようとしていた。

「皆、準備はええな!？」

勢い良く声かけをしたのは、低身長に茶色のツインテールの程良い肉付きのロリ少女。

土妖精ノームと適合し、精霊地姫ノームアとなった土夢地歌は、男勝りに吠える。

「準備万端っス！」

セミロングのオレンジ色の髪を短く後ろに結んだ巨乳後輩で火の

精霊サラムンダーと適合し、精霊火姫サラムンディアとなった火神炎楽は、やる気に満ちた返事を返した。

「ええ」

冷静に同意したのは、藍色のストレートヘアのスレンダー生徒會長の少女。

水精霊ウインディーネと適合し、精霊水姫ウインディアに変身した水野流花。

「い、いつでも大丈夫！」

少し遅く返事したのは、明るい緑色のボブヘアの少女。

風精霊シルフと適合し、精霊風姫シルフィアに変身した森野風子も少しビビりながらも奮起していた。

邪精霊との戦いも最終盤。人間の邪悪な欲望を吸い上げ山を思わせる大きさに巨大化した敵のいる空間に繋がるゲートを前にしている。

対峙するのは、精霊達の力を借りて変身した純粹な心を持った中学生の少女達だ。

「皆、必ず無事に帰って来てね…」

その後ろ姿を信じ送り出す少年、神野優。

特別な力こそ無いものの人間で唯一彼女達の正体を知り、邪精霊の戦いで苦楽を共にして来た精神的支柱となる存在。

「おうよ、ボン！ 任せときい！」

バンバンと小さな背中をノーミアが力強く叩く。

「痛い！ 痛いってノーミア！ 変身時に全力でビンタは洒落にならないって！」

「相変わらず仲が良いっすね！ それじゃあ私も」

「ちよ、サラマンディアまでやめ……いったツツ！！？」

「こんな時なのに緊張感無いわね……こんな感じで大丈夫かしら……」

「客観視してないで二人を止めてよ！ 世界の前に優さんが壊れちゃいますよ……！」

いつものように軽口を叩く五人だが、どこかぎこちない雰囲気が声色や仕草から感じられる。

（当然だ、これから死地に向かうのだから……そんな彼女達に僕は、

背中を見守る事しか出来ない……僕にも力があれば……）

「大……丈夫だよ」

俯いていた優に声をかけたシルフィアは弱気ながらもニコツと笑顔を浮かべている。

「そうっすよ！ 師匠がお留守番するのは、昨日の話し合いで皆んなで決めた事なんすから！」

サラマンディアも言った通り邪妖精の力は、予想以上に強大で力の無い優は、置いていくと決めていた。

「貴方が足手まといだから置いていく訳では無いことは、昨日も話したわよね？ 私達は、貴方が無事でいるからこそ希望を持つて最後まで戦えるの！」

強い口調でウィンディアもフォローをしてくれる。

（そうだ！ 僕以上に彼女達の方が不安なはずだ……ここで僕に出来るのは一つだけ）

「勝てよ……！！」

「はいッス！」

「ふふっ、了解」

「よっしゃっつっ！！」

「うん！」

（地歌、炎楽、流花さん、風子ちゃん…必ず帰って来て！）

優以外の全員がゲートと共に消えていった。

ゲートの中は、暗闇が何処までも続いていて、静かすぎるその空間に四人の足音が響くのみ。

「真っ暗っスね。 よっと」

サラマンディアが気を利かせ、火球を飛ばして暗い道を照らす。

右も左も分からないのでとりあえず前に向かって少女達は、歩き出した。

「にしてもさっきのボンの顔…不安が表に出すぎだわな」

「まあそこは、いつもの事じゃない」

「正直なところも師匠っぽいっす！」

「ですね」

「しっかしあれでやる時はビシッと決める男じゃ！ 四人とも同じ男に惚れられる器ももつちよる」

「この戦いが終わったら貴方達相手でも容赦しないわよ」

「負けないッスよ」

「わ、私だって！」

彼が居ない所で四人の話題は、自然と彼になるくらいに全員メロメロになり、一時期メンバー間で仲違いをしてしまうこともあった為、彼女達が決めた邪精霊を倒すまで優との恋愛禁止を決めていた。

「あれ…：光が」

暗闇の中にぽつんと光が現れる。

「ここに入って来いと言わんばかりじゃな」

「罠の可能性もあるわよ」

「でも、他に出口は見当たaranさそうっすね」

「行くしかない…か」

「最大限警戒していくぞ！」

光の先には、邪精霊が待ち構えていた。

不意をつく訳でも無く、罠を張っている様子も無い。

「ようやくお出ましか」

テンプレの悪党台詞と共に姿を現したのは、邪精霊スプリガン。

人間の欲望で醜く肥大化した体は黒紫色の風船から無数の手を生やし、中心に顔が形成され見る者に嫌悪感と恐怖心を抱かせる見た目をしている。

「おうおう、正義のヒロイン様ご登場や！ 瞬殺したるで覚悟しとけや！」

「ふふ、愚かな者の発言だな…自分と相手の力量も測れんとわな」

「わかってないのは、あんたの方ッスよ」

「そうね、どれだけ人間の欲望を吸い上げても貴方の近くには誰も居ない！ そんな人が私達の絆の力に叶うはずないわ！」

「私達には、ここにいる仲間と待っていてくれる大切な人のためなら無限に力が湧いてくる。 あなたには、絶対負けないわ！」

「仲間だの、守るものなのは、くだらん弱者の言い訳。 ワシ以外の弱者は、支配されていれば良いのだ！」

スプリガンは、台詞が終わると同時に紫色のビームを放つ。

「任しちょき！！」

ノーミアが巨大な木槌を地面に振り下ろすと土が隆起し、四人を覆うほどの土壁が形成される。

土壁により攻撃を防ぐと自慢気にノーミアは、鼻を鳴らす。

「この程度でわしの守りを突破できると思うなっ！」

「さすがッス…竜の息吹！」

先程の攻撃で起きた土煙を利用してスプリガンに近づいていたサラマンディアが大きく息を吸い込み炎を吐きかける。

スプリガンの巨体を炎が包むとすかさずシルフィアが追い討ちを

かける。

「風の牢獄で閉じ込めるっ！」

杖を握りしめるとスプリガンの周りに竜巻が発生し、炎を更に大きくさせる。

「グオオオオオッッ！！！」

竜巻の中で苦しそうな声で呻くスプリガン。

しかし四人は、攻撃の手を止めずフィニッシュをいつものように彼女に任せる。

「『ウインディアっっっ！！！！』」

「ええ、分かっているわ！」

キリッとした表情で大弓を構えると水の塊が矢の形を成す。

「これで終わりよ！ 浄化の一矢！」

放たれた矢は、水色の綺麗な直線を描き竜巻の中に消え、大きな爆発を起こした。

「やったッスか！？」

あまりにもフラグすぎる台詞をサラマンディアの口から出てしま

う。
他の三人もじつと爆発で出来た霧を凝視していると大きな影が浮かび上がる。

「中々良い攻撃だったぞ！ 次は、どうワシを楽しませてくれるのだ？」

「なんじゃと……攻撃がまるで効いとらないか！？」

「そんな……」

ノミアとシルフィア表情が陰しくなる。

彼女達の連携は、完璧に近いものであり三人の必殺技も最大火力で叩き込んだが攻撃がまるで効いていないのか余裕をたつぷりと見せつけるスプリガン。

一気に指揮が下がりそうになるもそれを察した最年長のシルフィアが檄を飛ばす。

「まだよ！ 一度攻撃が通用しなかっただけ。 私達四人の力を合わせれば必ず奴を倒せるはずよ！」

「そうですね、全員の力を一つに合わせれば」

「おっしや！ 次からわしも攻撃に加わるで！」

「次こそ決めるツス！」

ここから逆転に向けて三人が全身するが無防備となった背後から迫る水色の曲線に胸を撃ち抜かれる。

「どう……し……て」

「どうして？ こういう事よ♡」

力なく地面に伏したノーミア、サラマンディア、シルフィアを通り過ぎて敵であるはずのスプリガンに跪いた。

「ご主人様♡ バカ女共を騙す為とはいえ、攻撃するような真似を
してしまい申し訳ありませんでした…」

申し訳なさそな表情を浮かべるウインディア。

「ククク、良いタイミングだった。褒めてやる」

「あっ♡」

綺麗なストレートヘアを力任せに掴み、ウインディアを立たせて唇を食った。

「ん♡ ぶちゅちゅ♡」

濃密な男女のスキンシップを見せつけられ呆然としてしまう三人は呆氣に取られてしまい、ウインディアに掛ける言葉が見つからない。

ここでもノーミアが一番最初に問いかける。

「ほ…本当にわしらを裏切ったんか！？」

「流花さんどうしてツスカ？」

「簡単な事よ。 私は、ご主人様の雌奴隷だからね♡」

「説明になってないよ。 私達友達じゃなかったの？」

「説明…ね、してあげるわ。 実は、私…皆に抜け駆けして優に告白して振られちゃったの♡ そして隙が生まれた心にご主人様の闇のエネルギーを流し込まれてわるーい子に調教されちゃったの♡」

全てのしがらみから解放され、仮初の関係を自分勝手に修復不可